

《研究ノート》

宮武正道によるマレー語辞書の特徴に関する覚え書き¹

上田 達、James T. Collins、Karim Harun

1. はじめに

本稿は、宮武正道(1912-1944)のマレー語辞書の特徴を明らかにすることを目的とする。宮武は研究機関に所属することなく、在野の言語研究者として、第二次世界大戦前と大戦開始の時期に、辞書やマレー語に関する本を複数出版している。彼の言語研究の取り組みは、同時期の世界のマレー語研究を概観した Teeuw (1961) などでも特に顧みられてこなかった。だが、近年、黒岩(2011、2012、2014)の先駆的な取り組みにおいて、宮武の関心の所在やマレー語世界との邂逅の経緯が明らかにされてきた。また、舟田と工藤(2017)は辞書刊行にいたる経緯や当時の日本とインドネシアをめぐる社会情勢なども射程に入れつつ、彼の取り組みを明らかにする作業を始めている。しかし、宮武の辞書が同時代の他のマレー語辞書と比べてどのような特徴を有するかを、具体的なエントリーに目を向けて明らかにする試みはまだない。本稿はそのための予備的な作業として位置づけられる。すべてのエントリーを網羅的に分析することは現時点で筆者らの手に負えるものではないため、射程を限定的にした上でその特徴を示す作業を行っていく。

本稿はまず黒岩の論考に依拠しながら宮武の経歴と取り組みの概略について紹介した後、彼が編纂に関わった三冊の辞書におけるエントリーを他の辞書と比較して、その性質を抽出する。今回の作業は、マレー語辞書編纂のなかで、あまり触れられてこなかった(Collins 2016)、日本におけるマレー語辞書編纂のうち、宮武の作業に注目するものである。スコープは甚だ限定的であるが、豊穡なマレー語世界の一端をうかがい知る契機としたい。

なお、本稿が関心を寄せる宮武や、その比較対象として言及する他の辞書の編者らが、「馬

来語」や「マレー語 (Malay)」を慣例的に用いていることから、本稿もマレー語という語を用いることとする。マレー語は東南アジア島嶼部で交易言語として話されてきた言語を指す。マレー語は、国民国家成立後はインドネシアでインドネシア語として、マレーシアやブルネイなどではマレー語として、それぞれ国語とされた。インドネシアはオランダに、マレーシアやブルネイは英国による植民地支配を受けたという異なる歴史的背景を有するだけでなく、それぞれの地域内で異なる言語を話す民族集団からの影響などで、現在は語彙や発音などにおいて異なる部分が少なくない。しかしながら、本稿ではこれらの国民国家が独立する前の時代に焦点を当て、当時の著者たちの用法に従う形で、地域のリンガフランカとしてのマレー語を取り扱うものとする。

マレー語のアルファベット表記は、英国支配下にあった地域と、オランダ支配下にあった地域とで、幾つかの点で違いがある²⁾。本稿では原文のままのもので表記するものとして、理解の妨げになる際にのみ注釈を入れていく。

2. 宮武正道とマレー語辞書

2-1 宮武の生涯

本節では主に黒岩 (2011) によりながら、宮武正道の生い立ちとマレー語世界との出会いについて述べる。宮武正道は奈良県出身のアマチュアの言語研究者で、1912年9月6日に奈良で生まれた。生家は現在の近鉄奈良駅にほど近い場所にあり、彼の父は奈良で八代続く製墨店を営んでいた。能を愛した宮武の父は、自宅に能舞台を作るほどの風流人だった (黒岩 2011: 127)。1925年に奈良中学校に進学した宮武は、切手集めに目覚めた。こうした生育環境やモノへの執着が、後の知的関心に結びついていたのかもしれない (ibid.: 128-129)。

1930年に奈良中学を卒業した宮武が進学したのは天理外国語学校である。天理外国語学校は天理教を海外で布教するための外国語能力を持った子女を養成するために1925年に創設された。同校は英西露仏独伊といったヨーロッパ言語だけでなく、蒙古、中国、馬來、印度、朝鮮といったアジアの言語を教育する機関だった。天理外国語学校時代に、宮武は同校の馬來語部でマレー語を履修していたが、入学前から関心のあったエスペラントへの興味がますます高まり、奈良エスペラント協会を友人等と創設するほどだった (ibid.: 130)。同会は『EI NARA』という機関誌を発行しており、その中にパラオからの留学生の名前があった (ibid.: 131)。パラオからの留学生のエラケツとの交流は、彼の関心を南方の世界へと向けた。エラケツから聞き取った民話、童話、伝説を日本語訳して出版したのが1932年のことであった。この関心の変化を黒岩 (2011) は次のように述べる。「彼のエキゾティズムの対象が、人口の国際語エスペラントから、同じ「言語」である土着の民族語・パラオ語

のみならず、一度はパラオの土俗という民族文化へと広がった」(ibid.: 140)。

彼がマレー語にいつそうの関心を向けるようになったのは、1932年のセレベスとジャワへの渡航である。在学中の彼は、奈良市と私立の博物館の囑託を受けて、船で神戸を発った。約10日の航海を経てマカッサルに到着した後、スラバヤに至る(ibid.: 142)。彼はインドネシアに1932年8月3日から17日まで滞在しており、その間、スラバヤ、スマラン、バタヴィア、バンドン、ジョグジャ、ソロとめぐり、スラバヤから帰国している。

宮武は、後にインドネシアの初代大統領になるスカルノが1943年11月に来日した際には通訳を担当して、奈良県よりマレー語担当の通訳事務を囑託されている。しかし、1944年に彼はマレー語への関心を失ったと黒岩は記す(ibid.: 152)。「今頃から馬來語などやり始めても何もならぬ」といい、タガログ語辞書編纂へとりかかった³。しかし、その完成を見る前の1944年8月16日、彼はこの世を去った。32歳の若さだった。

2-2 マレー語学習とマレー語辞書

宮武がインドネシアに滞在した際に知り合った一人が現地新聞 *Bintang Timur* 紙の主幹であった *Parad Harahap* である。翌年、彼は南進を唱える石原廣一郎と接触した後、宮武を訪ねている(ibid.: 143)。彼からの依頼を受けて、1935年に宮武は初めてマレー語教本を作って出版した⁴。

日本におけるマレー語教育の現状について、宮武(1939)は次のように記す。「我國で規則的にマレー語の教育をほどこす様になつたのは明治四十一年(1908年)に東京外語に東洋語速成科が設置され馬來語、ヒンドスタニー語、タミール語、蒙古語の四課學科を教授せられる様になつたのが最初である」(宮武 1939: 7)。宮武がこれを記した当時、マレー語は東京と大阪にある「国立の外国語学校(現在の東京外国語大学と大阪外国語大学)で教えられていたほか、」天理外国語学校や拓殖大学で教授されていた(宮武 1939: 7-8)。当時出版されていたマレー語の学習書について、宮武は明治45年(1912年)に刊行された『馬來語集』(釣田時之助、松田英一著、大阪釣田繁吉)と『馬來語獨修』(山道儀三郎著、岡崎屋書店)を挙げ、特に後者について、宮武は条件付きながら「當事としてはなかなか良く出來て居て現在でも古本屋で探し出してマレー語の研究に使用して居る人を見掛ける」(宮武 1939: 8)と好意的に評している。

これら先駆者の功績を一方では評価しつつ、宮武のマレー語辞書への情熱は先達への不満から来ている。宮武が『南洋文学』を記す時点で刊行されていた辞書は、宮武によれば日馬が一つと、「馬日小辞典」が二つあったという⁵。これは、おそらく次の三冊を指すと思われる。

- ・越智有『馬日辞典』、南洋協会台湾支部（台湾総督府内）、大正 12 年（1923）。
- ・平岡潤造、バチー・ビン・ウォンチ（共著）『馬來 - 日本語字典』、南洋協会台湾支部（台湾総督府内）、昭和 2 年（1927）。
- ・増淵佐平『実用馬來語辞書』花屋商会書籍部（シンガポール）、昭和 2 年（1927）。

宮武が参照していた辞書の一つが『馬來 - 日本語字典』（南洋協会台湾支部、1927 年）である。宮武はこれを評価する一方で、同書が英国人のマレー語研究者 Wilkinson の手による *Abridged Malay-English Dictionary* を底本としていることから、英国支配下にあったマレー半島のマレー語に傾倒しており、蘭印の出版物に使用されている単語が欠落していると不満を述べる（黒岩 2011: 144）。宮武は、これらの既存の辞典を用いては「小学校の読本すら満足に読めない」とまで記す。

宮武の不満は、辞典に用いられているのがマレー半島のマレー語であったことの他に、用例や出典が古典文学に偏っていたことにある。これに対して、彼は主に新聞や雑誌に見られる「生きた」マレー語を読むことに関心をおいた。マレー語だけにこだわることなく、日常的な言語生活で使用されるほどまでにこなれた言葉であれば、中国語、オランダ語、バタビヤ方言に由来する語彙も含めて、小辞典という形でまとめ、後にこれを増補したものを 1938 年に岡崎屋書店より『日馬小辞典』として出版している（宮武正道『日馬小辞典』岡崎屋書店、1938 年；*Kamoes Bahasa Nippon-Indonesia*）⁶。宮武（1938）は序文に次のように記している。

本書ノマレー語ハ蘭領印度デ現在使ワレツツアル単語ガ主デ、古文ヤ古典ニノミ
使用サレル様ナ語ハ全部之ヲハブイタノデ、本文中ノ語彙ハ總テ生キタマレー語
ト言イウルト思ウ

宮武が望む「生きたマレー語」のような、日常的な使用に耐えうる言語の習得は、当時の国策としても推進されていた。大東亜共栄圏の確立が外交方針として挙げられた 1940 年の翌年 11 月 20 日に制定された「南方占領地行政実施要項」は、東南アジアにおける占領政策の指針を示している。この中で治安回復、国防資源獲得、作戦軍現地自活の三大原則が掲げられた。この原則に基づいて、マレー語やフィリピン語の現地語習得が目指された（江利川 2016: 133-134）。マレー語は陸軍において既に 1915 年から重視されていたが⁷、その質と量は十分なものとはいえなかった（*ibid.*: 136-137）。日本軍が南方進出する際に兵力や物資供給が準備不足だったのと同様に、現地語に習熟した軍人の養成も整備された状況ではなかった。

こうした状況の中で、1941年12月にマレー半島コタバルに日本軍が上陸して、いわゆる太平洋戦争が開戦する二ヶ月前には、海軍軍司令部によって簡素な単語帳と会話集からなる『馬來語会話参考書』が刊行された (ibid.: 132)。同11月には後に首相となる東條英機が陸軍大臣として序文を寄せた『最新馬來語要諦』が刊行された。さらにはコタバル上陸直後の12月には陸軍参謀本部から旺文社の赤尾好夫に辞典の刊行が依頼された。突貫工事でなされた辞書編纂は、日本軍がシンガポールを攻略した1942年2月15日に『馬來語大辞典』として組版が終了し、同辞書は4月に出版されることになった。宮武のマレー語辞書への取り組みも、こうした国策の中に組み込まれていたと見る事が出来る。

宮武は上記の『馬來語大辞典』の出版された翌月である3月に『コンサイス馬來語新辞典』(興亜協会編『コンサイス馬來語新辞典』宮武正道著、宇治武夫・ラーデン・スジョノ校閲、愛国新聞社出版部、1942年3月10日; *Kamoes Baroe Bahasa Indonesia Nippon*) を出版している。彼の辞書は、1930年代から活発に活動していた岩田愛之助という右翼人士を中心に結成された団体である興亜協会から出版されている⁸。興亜協会は、大東亜共栄圏構想が発表された後に、現地に「皇道精神で“武装”された青年や学生を「南方要員」として送ること」(後藤 1986: 248) を目指して、1940年11月11日に設立された。同会は南進をサポートする人材育成を目指して、精力的に語学教育を進めていた。1941年には同教会の教育施設として興亜専門学校(後の亜細亜大学)が設立された。同校では、「東南アジアとりわけインドネシアを当初からきわめて重視したカリキュラムを組ん」(後藤 1986: 251) であり、東南アジアの言語ではインドネシア語のみが教授されていたという。

宮武の手による『コンサイス』は、当時の日本で広く受け入れられていたようである。宮武が最初に出版した辞書である『日馬小辞典』は、広告等も含めて、当時の新聞紙面に登場してこない⁹。しかし、1942年の『コンサイス』は1942年3月21日の紙面に出たのを皮切りに、1944年まで29回の登場回数を誇る。とりわけ、出版した1942年3月以降、9月までにほぼ毎月少なくとも一度は紙面に広告が打たれている。1942年5月12日のそれは、いささか大げさにそのクオリティを次のように喧伝している。

語数六千語。日本人の力で十年の研鑽の成果である。従来の翻訳辞書を圧倒して
しまった。最近十年の馬來語新聞より新語六千語を集め、(中略) 世界無類の馬來
語新辞典である。

翌年、重版を出した後の次のようなコピーもまた、宮武の辞書が獲得していたパブリシティを示すものといえるだろう。

「増刷が出来た。売り切れぬうちにお求めください——標準辞書として現地で採用されている---(中略)---正確無比・類比書を圧する馬來語辞書の最高峰！」(1943年6月10日)

「現地標準辞書、南進必携」(1943年9月10日)

「現地での活動に本辞典は絶対必要である」(1944年1月24日)

「既刊10万突破」(1944年1月29日)

表 1: 宮武が関与したマレー語辞書¹⁰

辞書	収録語数	頁数	価格
宮武 1938	6,000	224 (42 頁に及ぶ文法ガイドを含む)	1.1 円
宮武 1942a	60,000	334 (323 頁から 334 頁までの文法解説を含む)	3.8 円
統治学盟 1943	100,000	1,774	15 円

興亜協会から辞書を刊行した後、宮武は東京外国語学校の講師である菌田顕家と『標準マレー語講座』を出版している。彼との協力関係は、1943年の『標準馬來語大辞典』(統治学盟編纂『標準馬來語大辞典』博文館 1943年7月; *Kamoes Bahasa Melajoe (Indonesia)-Nippon Jang Lengkap*)にも結実する。彼が関わった最後のマレー語辞書となった1943年の辞書は、刊行された後、新聞広告にはまったく登場していない。出版前の1941年10月29日に予告の広告が打たれているだけである。また、彼の辞書と同じ時代に出された辞書に、上述の武富正一による『馬來語大辞典』がある。出版されたのは1942年4月15日のことである。しかし、こちらも新聞広告に13回登場するのみである。宮武の辞書が3円80銭だったのに対して、こちらは定価が20円であり、一般向けというよりは研究書としての側面が強かったのかもしれない¹¹。1943年4月21日には『大辞典』縮刷版が5円で発売されたという広告があるものの、実用性という側面からは、宮武のそれに比して支持されなかったのかもしれない。

日本の南進政策が遂行されていく社会情勢は、宮武の言語への関心を社会の中に浮かび上がらせることになった。在野の言語研究者だった彼が日本におけるマレー語辞書編纂の歴史にその名を刻んだのは、こうした時代背景によるものだった。

3. エントリーの比較

前節で辞書編纂に際して宮武が不満を持っていたことを述べた。その不満は既存の辞書が古典文学での用法に傾倒していることに向かっており、宮武は「生きた言語」を収録して

いることを自身の手による辞書のメリットの一つに挙げていた。では、彼のいう「生きた」性質はどのような形で辞書に結実しているのだろうか。本稿では、宮武の三冊の辞書と、先行する辞書とのエントリーの比較と対照を通じて、彼の辞書の特徴を示していきたい。特に彼一人で作業を行った 1942 年の『コンサイス』に注目して、宮武の「生きた言語」とは何かを示す。

先行する辞書として次の三冊を設定した。日本で最初の辞書を著した越智（1923）、マレー語-英語辞書の Wilkinson（1902, 1932）である¹²。インドネシアを支配下に入れていたオランダにおいて刊行されていた辞書として H.C.Klinkert の *Nieuw Maleisch-Nederlandsch woordenboek, met Arabisch karakter, naar de beste en laatste bronnen bewerkt* や William Marsden の H.Halkema の *Maleisch Hollandsch dan Hollandsch Maleisch* などのオランダ語辞書があるが、今回の作業からは紙幅の都合から除外することとした。また、すべてのエントリーの比較を行うのではなく、一定のカテゴリーを便宜的に設定して見ていくことにしたい。宮武の辞書について分析を試みる Collins（2016）が、医療関係の語彙に注目して本稿と同様の比較・対照作業を行っているが、本稿では医療と同じく生活に密着していると想定しうる衣服に関連する語にのみ傾注することとしたい¹³。

3-1 既存のマレー語辞書

筆者らの知りうる限り、日本語で書かれたマレー語辞書として最も古いのが越智の『馬日辞典』（南洋協会台湾支部（台湾総督府内））である。同書は 1923 年に刊行されており、1927 年には宮武が通っていた天理外国語学校の附属図書館に蔵書として受入が登録されている¹⁴。宮武の辞書の検討に入る前に、宮武の辞書が世に出るより前に日本で刊行されていた辞書の一例を把握して、彼の強調する「生きたマレー語」の性質を描写する足がかりとしたい。

越智の辞書のエントリーを見ると、Wilkinson（1902）を主たる情報源としたであろうことが容易に看取できる。両者でほぼ内容が一致している次の二つのエントリーを例として挙げる。

jam（時計）

越智：時計（掛時計に主として）、時間、--sa-tengah j. 半時間、--sa-jam dua 一二時間）

Wilkinson : jam. Pers. A clock; an hour. Satengah jam: half-an-hour; Ht, Abd., 202* Sa-jam duwa: an hour or two ; Ht. GuL Bak., 15.

kebaya（クバヤ；民族衣装の類）

越智：Kébaya (Port) 外套（馬來人、混血人、志那人、の婦人用の）

Wilkinson: kĕbaya. [Port, cabaya,] Baju kebaya: a long outer garment worn by Malay, Eurasian and Straits-born Chinese women; Sh. Kamp. Boy., 13.

topi (帽子)

越智: Topi (Hind) 帽子 (一般の) Sun-hat

Wilkinson: topi Hind. A hat, especially a solah topee- or sun-hat. Orang bertopi: Europeans generally.

celana (ズボン)

越智: Chĕlana ズボン (上部はゆるく腓によく附いてゐる)

Wilkinson: chĕlana. Trowsers loose above but closing tight round the calf; Kam. Kech., 11. Menyengseng ch, : to tuck up one's trowsers Sh. Panj. Sg.

coli (女性用の肌着)

越智: Choli [Hind] 印度婦人の用ひる胸衣 (直接皮膚に接するもの)

Wilkinson: choli. [Hind.: id.] A tight-fitting native corset or bodice worn next to the skin; Ht.Gul, Bak., 105.

Wilkinson (1902) にある「Ht, Abd., 202」、「Ht. GuL Bak., 15」「Sh. Kamp.Boy., 13」などは、それぞれ用例の根拠となる出典情報で、いずれも文学作品である

対照して明らかなおり、jam も kebaya も、ほぼ内容が同一である。kebaya における、Malay, Eurasians, Straits-born Chinese women は、越智において「馬來人、混血人、志那人、の婦人用の」となっており、内容が日本人読者のために要約されているのもわかる。出典情報や語源となる言語も示している Wilkinson の英語による詳細な注釈を、越智は参考にしていただと思われる。宮武が序文において「日本語の訳については」と限定した上で先行の辞書に言及しているのは、これらの辞書が文学作品から用例を探し出す Wilkinson らの辞書であり、自身の目指す「生きたマレー語」とは異なる種類であることを頭に置いていたからだと思われる。

3-2 宮武の辞書

宮武は 1938 年と 1942 年の辞書の序文において、自分が蘭領印度で新聞や雑誌に数多く触れていたことを強調して、自らの取り組みに自信を示している。実際にこれらの媒体で使われている語に特に注意しながら、彼は辞書を編集したと思われる (cf. 黒岩 2011; 舟田、工藤 2017)。1942 年の『コンサイス』の序文では次のように述べている。

十年來筆者は蘭印のマレー語新聞の特別寄稿家としてビンタン・ティモール紙、シナル・スマトラ紙、グフフラット・ラジオ紙、スアラ・ウムム紙、プマンダンガン紙、シナル・スラタン紙等々に日本紹介文を書いて来た関係から、常に多数のマレー語新聞を見る機会にめぐまれて居たので、心掛けて従來の辞書に無い單語を集めていた（宮武 1942a）

これに続けて、宮武は自身の手による辞書の利点を述べる。

此中には現在世界中にあるマレー語の辞書のいずれのものの中にも無いものが非常に多い。しかも其等の言葉が日常の新聞に毎日現れて居るのであるから、筆者が本辞典に就て世界に誇り得る所ありとすれば實に此點である（同上）

穏当な自著への評価の通り、彼の試みの特徴として、まず蘭領であった地域の言語を多く収録していたことが挙げられる。越智（1923）や、越智の主たる情報源であったと思われる Wilkinson（1901）や、その大幅にヴァージョンアップされたものである Wilkinson（1932）や Winstedt（1922）らと違って、英領マラヤのマレー語ではなく、インドネシアのマレー語が多く収録されている。英語由来の言葉などを見ると、その違いは明らかである。たとえば、kaus というエントリーを見てみよう。

kaus

越智: Kaus ①靴②(Eng)寝臺”

宮武: kaos [Ned] =kaoes 襯衣 (シャツ) kaoes kaki 靴下; kaoes lampoe

電燈覆 badjoe kaoes シャツ

Wilkinson はこの語を英語の couch であるとしているのみで、越智もまた英語からの借用語であるとしている。これに対して、宮武（1942a）ではオランダ語由来の語として説明し、「上衣」の訳をあて、由来する語を列挙している。英語の couch に関する言及はない。

宮武の辞書の独自性は英語由来の語を除いただけではない。たとえば、ketayap と choli は、Wilkinson でそれぞれ「A little white skull-cap worn under a turban.」「[Hind.: id.] A tight-fitting native corset or bodice worn next to the skin; Ht.Gul, Bak., 105.」と記される。前者はマレー半島北西部のクダ州の方言とされ、後者は英領マラヤに移住してきたインド系の人々と関連する單語とされている。これらの英領マラヤの方言や、同地の社会

状況と密接に関連する語も、宮武（1942a）に収録されていない。

いっぽう、宮武と、越智や Wilkinson に共通して収録されている語は多数ある。しかし、その意味の記述において、宮武は自らの収獲に基づいて違いを見せている。たとえば広く紐状のものを意味する *tali* という単語を見てみよう。これはいずれの辞書にも収録されていることから、広く使用されていたマレー語の単語であったと言えるだろう。宮武は次のようにこの語を説明する。

tali (紐状のもの)

宮武: ①紐、綱 *pertalian* 接続、繋がり; *tali air* 小川 *tali api* 火縄 *tali doega* 水の深さを量る綱 *tali hidoep* 生活の糧; *tali kang* 馬の手綱 *tali leher* ねくたい *talimati* (*talipati*) *talitemari* 索條綱具 (船の) ②25 仙 (*talén*; *setali tiga orang* 五十歩百歩 ③3,381 疋)

語の基本的な意味を記す点で顕著な特徴はないが、下線を引いた部分は、越智（1923）にも Wilkinson（1901, 1932）にも出てこない用例となっている¹⁵。

類語において、先駆者のそれとは異なっているものとして、*seluar* も挙げておくことが出来る。宮武は「[Pers]ズボン、股引; *tali seloear* ズボン吊」とシンプルに記す¹⁶。いっぽうで Wilkinson（1901, 1932）はこの語がアラビア語とペルシア語でそれぞれ異なる綴りで用いられることを指摘して博識を披露するほか、「一枚のズボン (*Sa-hélai S.*)」や、「中国のズボン (*S.China*)」など、多くの用例を挙げる。だが、宮武はこれらの語をエントリーすることなく、上記の通り、Wilkinson（1901, 1932）には採録されない「ズボン吊り」を挙げているのは、*tali* の項目で「生活の糧」を紹介するのと同様である。とりわけ、後者は現在のインドネシア語辞典である *Kamus Besar Bahasa Indonesia* やマレーシアで出版されている *Kamus Dewan* のいずれにも掲載されていない。また、③3,381 疋とあるのは現在も含めて他の辞書には見られず、エントリーの妥当性として検討を要するかもしれないが、同時期のマレー語辞書にはない宮武の『コンサイス』が有するオリジナリティの一つであるとは言えるだろう。

rantai という語も、一般的に使われていたマレー語の単語で、宮武だけでなく Wilkinson からも収録している¹⁷。

rantai (鎖)

宮武: ①鎖; *berantai* 鎖で縛る; *badjoe rantai* 鏜; *Rantai Ke-ma`moeran Asia Timoer* 東亜共栄圏 ②チェーン (尺度) 英領馬來半島用語

ただし、上記のように、ものの連なりを想起させる鎖という語の比喩的な用法として、時代状況を反映した「東亜共栄圏」を宮武は収録しているのが特徴と言える。戦時下という特殊な社会状況ならではの語彙が宮武（1942a）に所収されていることは、同辞書の冒頭にある「本辞典刊行の辭」において、出版社である興亜協会が寄せた文章でも「本書が印刷に附せられて三ヶ月目に大東亞戦となり、多くの新熟語が生れたことは当然で」と言及されているとおりである¹⁸。

さらに宮武は *rantai* の意味として（おそらくは長さを測る）「尺度」を記し、マレー半島に由来すると述べる。これは、英領マラヤでマレー語研究を行った Wilkinson の手による辞書のいずれにも登場してこない意味である。宮武がいかなる経緯でこの意味を記すに至ったかは知るよしもないが、彼が Wilkinson とは異なる情報源を持っており、英領マラヤにおけるマレー語の用例にも目を配っていたことは指摘できるだろう。

宮武の独自性は、*ragam* という語においても見いださうる。宮武はこの語について次のように記す。

ragam

宮武: *ragam* ①[Tan¹⁹] 調子、性質、種類 ②集る、合せる。keragaman 団、集まり; *poespa ragam* 美しき音調、花の如き音調

この語の一つ目の意味として挙がっている「調子、性質、種類」は、先駆者である越智が音楽に関する語としているのと僅かに異なる。

越智: *Ragam* (Hin) 音楽の調べ、音階形式 (--Banyak orang, banyak ragam- nya
人は各々性質を異にす、十人十色

越智と対比すればわかるように、宮武は *ragam* の意味を、必ずしも音楽に限ったものとしていない。もっとも、Wilkinson (1901) は音楽関連の語彙とした上で、次のように比喩的に流用されることもあると記している。

Wilkinson 1901: *ragam* Hind. Modes in music; modulation; melody; variety of sound; (by metaphor) variety of colouring, nature, or temperature.

宮武は、音楽に関わる語であると強調せず、*ragam* の持つ意味を補足しようとしているよ

うに見える。また、二つ目の意味として挙がる「集る、合せる」は、越智、Wilkinson (1901、1932) のいずれにも見いだすことが出来ない。現代のインドネシア語辞典である *Kamus Besar Bahasa Indonesia* も同様である。だが、このエントリーは故なきものではないと筆者らは考えている。現在、マレーシアの言語局から出版されているマレー語辞書 *Kamus Dewan* の *ragam* の項には、ジャワ語由来の意味として「団結する (*bersatu hati*)」と「仲の良い、融和した (*rukun*)」という意味が掲載されている。宮武が辞書を作成していた時代に、インドネシアでこれらの用例があったことが示唆できよう。

3-3 宮武の独自性

宮武は『コンサイス』において、おそらくは自身の知見に基づいて、先行する辞書との違いを出すことに成功していた。彼の試みは、コンサイスより大きく紙幅を増やした 1943 年の『大辞典』に引き次がれているのを見る事が出来る。同辞典は執筆に着手したのが 1941 年 1 月とされており、菌田の要請を受けて 1941 年 2 月に打ち合わせを行い、作業に着手したという (舟田、工藤 2017: 100)。収録語数で Wilkinson (1932) を凌駕していると謳うとおり、同時代の辞書にない語を多く収録している点で、同辞典の持つ歴史的価値はきわめて大きい (舟田、工藤 2017: 110-111)。いっぽうで、宮武 (1942b) がマレー語の学習参考書である『大東亜語学叢刊マレー語』で述べるように、Wilkinson (1932) を参考にした部分がかかなり広範に見られることは指摘できる²⁰。

たとえば、衣服を表す “*pakaian*” の説明は、「[Batav.] 用ふ、著る、つける (俗語では *pake'*ともいふ) *pakaian* 着物、身に着けるもの (着物、武器、馬具、寶石等)」で始まり、用例や成句を記すが、これも、次の通り Wilkinson の同項の説明の冒頭とほぼ同じである。“Using, observing or wearing: also (Java) *pake Pakaian*: anything worn; whether clothes, weapons, harness or jewellery.” また、「ズボン (*seluar*)」や「腰巻き (*sarong*)」も Wilkinson (1932) のエントリーとほぼ同内容と言っていいだろう。

いっぽうで、内容は重複しているものの、宮武らが自分たちの成果を忍ばせている箇所も散見される。「靴 (*sepatu*)」という語を例に挙げる。以下に見るように、他の単語と同様に Wilkinson (1932) からの強い影響が見てとれる。内容が同一である箇所には下線を付している²¹。

sepatu (靴)

宮武 (1942a): *Sepatoe* [Port] 靴 *Sepatoe Koeda* 蹄鉄

統治学盟 (*sepatu* 英) [Port] 靴 (= *kasoet*) *sepatoe besi* [N.I.] 蹄鉄 (= *sepatoe koeda*) *sepatoe boet* 長靴 *sepatoe kain* ズック靴 *sepatoe koelit* 皮靴

kembang sepatoe (植) 佛桑華 (ぶつさうげ) seodip sepatoe; sendok sepatoe
靴籠 (べら) Toekang sepatoe 靴屋 toemit sepatoe 靴の踵 Tiada bersepatoe
靴をはいてゐない、素足の

Wilkinson 1932 sěpatu Port.Shoe; =[Min.] sipatu. S.běsi (N.I.) horse-shoe; Sul
Hid.27. S.but: boot. S.kain: canvas shoe. S.kulit: leather shoe. Kembang
S.: shoe-flower. Sudip s.: shoe-horn. Tukang s.: shoe-maker; Ht.Abd.117.
Tumit s.: heel of shoe. Tiada bersěpatu: shoeless; barefooted; KampGlam.
18. See also kasut, se~tiwel.

上に見るように、sepatu koeda は宮武が付け加えているとおぼしき意味である。このように、『大辞典』には、Wilkinson (1932) を訳しただけの箇所が多いとはいえ、異なる部分を有することは指摘しておきたい。同じことは kasut (靴) のようなエントリーについてもいえる²²。言葉の意味は Wilkinson のそれと内容を同じくしていることが看取できるが、kasoet getah や kasoet ilalang などは Wilkinson にはない用例が加わっており注目に値する。

kasut (靴)

宮武 (1942a) 靴; berkasoet 靴を履いてゐる; kasoet sérét スリッパ kasoet pandjang 長靴

統治学盟: kasoet (kasut 英) 靴; (マレーでは一般に) 履き物: [Java] 上流婦人の刺繍のある履物 (スリッパ) berkasoet 靴を穿いてゐる kasoet beloelang; kasoet getah; kasoet ilalang; kasoet kajoe; kasoet kěntjong kasoet pandjang; kasoet Pélembang; kasoet potong; kasoet roempoet; kasoet sérét; boenga kasoet; keleboet kasoet; pakai kasoet; sepsang kasoet, tapak kasoet, toekang kasoet; Perahoe soedah dikasoet 船は第二の龍骨がつけ加へられた。

Wilkinson 1932: Shoe; boot; (Mal.) footgear of any sort: (in parts of Java) embroidered slippers worn by ladies of rank. K.bělulang; K.Kayu; K;Kenchong; K.Pélembang; K.rumput; K.seret; Bunga K.; Kěřebut k.; Tapak K.; Tukang K.; Sapasang K...For sandal footgear, see chapal, těrompah, chěrpu.

上に見るように、sepatu は kasut よりも重複箇所が多い。ただ、こうしたほぼ同内容のエ

ントリーにおいて、わずかに違いを見せている箇所がある。そうした違いは、宮武(1942a)で収録されている語であることは強調していいだろう。

宮武がコンサイスの *kasut* の項で示している「*berkasoet* 靴を履いてゐる」「*kasoet pandjang* 長靴」は、1943年の大辞典にも継承されている。また、*sepatu* の用例は一つを除いて、Wilkinson の辞書にある用例だが、唯一の例外である「*Sepatoe Koeda* 蹄鉄」は、宮武(1942a)にあがるエントリーであった。

同様のことは「帽子 (*topi*)」についても見受けられる。

topi (帽子)

宮武(1942a): [Hind]帽子、*topi wadja* 鉄兜

統治学盟(1943): [Hind.]帽子(普通には *topi* は縁のある帽子を意味するが、元
印度では頭布、頭に巻く布に対して特に造られた帽子を意味してみた。

topi ketajap 頭布 *orang bertopi* 帽子を着けてゐる人、ヨーロッパ人 *topi wadja* 鉄兜

Wilkinson(1901): *topi* Hind. A hat, especially a *solah topee*- or sun-hat. *Orang bertopi* : Europeans generally.

Wilkinson(1932): [Hind.] Hat. Originally (in India) any specially made hat or cap, in contr. to a mere kerchief or roll of cloth; cf. the difference between tailored and untailored garments. This old generic meaning is met with occasionally in expressions like *topi terbus* (*tarboosh*); *t.ke~tayap* (*skulcap*). More usually *topi*=hat (in contr.to cap):cf. *orang bertopi* (hat-wearers, European). of late years applied specifically by Europeans to sunhats or **solah topees**.

宮武(1942a)で挙がる *topi wadja* が Wilkinson にはない独自の用例として挙がっていること、そして、1943年のものが Wilkinson(1932)を要約しつつ、*topi wadja* という1942年の『コンサイス』のそれを引き続き採用していること、の二点が伺えることは、上に述べたことと同様である。

また、下駄に類する語彙を参照したところ²³、宮武(1942a)が独自の取り組みを見せたことがわかる。宮武は *gamparan* という語を収録して、この語の意味として「[Soen]①下駄の一種、②私」であると記す。この語は、Wilkinson(1901)に収録されておらず、Wilkinson(1932)で次のような説明が記されている。

gamparan [Java] Wooden clogs with a toe-peg = *terompah kayu*.

Wilkinson (1932) との違いとして、1) Wilkinson はジャワ語起源であるとしているのに対して、宮武は西ジャワの地域語であるスندا語起源であるとしていること、2) Wilkinson が言及していない人称代名詞を宮武 (1942a) が示している点を指摘できる。

現代のインドネシア語辞典 *Kamus Besar Indonesia* (第四版) によると、**gamparan** は下記の通り、端的に「木製の下駄」という説明を付している。

gamparan *n* bakiak (terompah, kelom) dari kayu

ここにはこの語が何語に由来しているかは言及されていない。ジャワ語辞典二冊を繰ると、確かに次のような形でこの語が掲載されている。

gampar **an* 1. a game in which a tone is kicked around. 2. wooden sandals.

(*Javanese-English Dictionary*)

gamparan a kind of sandals with a knob between the toes

(*Old-Javanese-English Dictionary Part I*)

gamparan がジャワ語で下駄という単語であることは、Wilkinson の記していることと一致する。ただし、宮武の示した人称代名詞としての **gamparan** は見いだせない。

いっぽうで、スندا語の辞典 (Koesman 1984) における **gamparan** のエントリーは次の通りである。

gamparan, 1. alas kaki dr kayu, téklék; 2. panggilan kpd orang kedua yang dihormat

これによると、一つめの意味は、ジャワ語辞書にあるのと同様に「木で出来た履き物」で、二つめは「敬うべき人に対する二人称の呼称」と説明されている。宮武は **gamparan** という語が、「木製の履物」という意味だけでなく、他の意味を持つこと、そして、それがスندا語由来の語であることを辞書で紹介していたのである。

宮武が「私」と書いているのは、おそらくスندا語辞書における二人称敬称を指すと筆者らは考えている。一般に、辞書を作るために限らず、他言語における単語の意味を確定する作業はコミュニケーションを伴う。特に、こうした人称代名詞においては、意味を聞く側に

とっての「私」なのか、答える側にとっての「私」なのかはしばしば誤解が生じることが理解されよう。筆者らが繰ったスندا語辞典における「二人称敬称」が、当時も今も変わらないものであるするならば、「生きたマレー語」を捉えるべく、宮武が苦慮していたことが伺える。同時代にマレー語として現地で使われていた言葉として、ジャワ語のみならず、スندا語にまで目を向けていたことは、宮武（1942a）の独自性として強調しておいていいだろう。

4. おわりに

以上のように、「生きたマレー語」にこだわって辞書編纂に力を尽くした宮武の辞書の特徴を示すべく、衣服に関連する語を対象を絞り、主に Wilkinson を比較の対象として検討してきた結果、次のようなことが指摘できる。まず、宮武（1942a）には、インドネシアで使われていたと思われる用例がいくつか見られる。衣服に関連する語に限っても、他の辞書にはない用例やエントリーがあることがわかった。Wilkinson の辞書とも違っていると同時に、日本で刊行されていた Wilkinson に準拠した辞書とも違いを見せている。

また、衣服関係の言葉に限ってみても、スندا語や方言などを起源とする他の言語に言及していたことがわかった。そのうちのいくつかは Wilkinson にも見られない宮武ならではのエントリーであった。これらの用例は豊穡なマレー語世界の一端を示すのと同時に、当時の蘭領印度における言語生活の現実を私たちがうかがい知る契機を与えてくれる。同時に、マレー語辞書の発展の歴史に新たな側面から光を当てるものとなり得ると考えられる。

同時に本稿が捉えきれなかった点についても記しておきたい。大きく二つの点には自覚的でありたい。まず、本稿では、衣服に関する語という限定をしたうえで、現在使っている衣服関係の語彙をピックアップすることから始めている。そのうえで、宮武の時代にさかのぼり、その意味や用例を調べるという方法を採用した。取り組みの端緒として一定の発見があったとは言えるだろうが、当時の「生きたマレー語」がどのようなものであるかは、より網羅的な検討作業が必要になる。たとえば、当時の辞書に掲載されている語から考えるというやり方も、当然採りうる方法である。

次に、オランダ語辞典との照合である。舟田らが行った親族への聞き取り調査によると、宮武は 16 もの外国語に精通しており、辞書編纂に際しては協力者であるスジョノを介して、オランダ人やポルトガル人の協力を仰いでいたという（舟田、工藤 2017:100）。当時、オランダ語を解する読者を想定して、辞書が刊行されていたことを想起すると、これらの辞書もまた、宮武の貴重なリソースになっていたと思われる。今回は当時のマレー語の世界を広く俯瞰するために、英語読者のために編まれた Wilkinson を対照軸に設定し

ていたが、当時刊行されていたオランダ語辞書との比較検討も考慮に入れる必要がある²⁴。

本稿の元となった発表原稿は「奈良からの眺め」という題を付していた。奈良に生きた宮武正道の目に、当時のマレー語世界がどのように映じていたのか、また、彼が捉えたマレー語世界はどのようなものであったのかなどは課題として残されたままである。本稿で行った作業を踏まえ、引き続き考察を続けていくこととしたい。

【謝辞】

本稿の改稿に際しては、二名の匿名の査読者より頂いた指摘を参考にさせて頂いた。記して感謝の意を表す。

注

- ¹ 本稿は 2017 年 2 月 28 日にマレーシア国民大学人文社会科学部で開催された「宮武正道の辞書およびマレー語辞書編纂についてのセミナー (Seminar Kamus Masamichi Miyatake dan Perkamusan Melayu)」において上田が発表した「奈良から見たヌサンタラの眺望——宮武正道の辞書編纂プロジェクトを通じて (“Pemandangan Nusantara dari Nara Menerusi Projek Perkamusan Miyatake”)」を改稿したものである。同セミナーは 2016 年に住友財団の助成を受けて、筆者らが 2016 年に行った研究プロジェクト “Japanese Contribution in Malay Lexicography” (助成期間: 2016 年 4 月～2017 年 3 月) の成果の一つである。記して感謝の意を表す。
- ² 宮武が関わった辞書では、基本的に蘭領式のスペルが採用されている。
- ³ Charles Nigg の *A Tagalog English and English Tagalog Dictionary* (Manila, 1904) の写真複製が彼のもとに残されていたという (黒岩 2011: 152)。
- ⁴ 宮武の出版したマレー語辞書以外の教本を含めて、第二次大戦前の日本で出版されていたマレー語学習関係の文献は、山口 (1996) にまとめられている。
- ⁵ そのほかに単語集、会話、文法書などが約 30 種類あるほか、マレー語で書かれた小冊子も数種出版されていると宮武は記す (宮武 1939: 8-9)。
- ⁶ 辞書を作成する経緯や作業は舟田と工藤の論考 (舟田、工藤 2017) が示している。
- ⁷ 陸軍が定める外国語学校への派遣制度を拡大する際に、マレー語はその一つとして数えられていた (ロシア語、中国語、ドイツ語、フランス語、英語、モンゴル語、イタリア語、スペイン語、オランダ語、ヒンドスタン語、マレー語)。海軍では 1918 年にマレー語とイタリア語と朝鮮語が外されたが、それでも 9 カ国語 (陸軍のそれからオランダ語、ヒンドスタン語、モンゴル語がなく、朝鮮語が入っている) を学ばせていた。
- ⁸ 岩田は「愛国社」を組織して積極的な中国進出を主張していたが、1930 年のロンドン海軍軍縮条約が締結されるに至り、これを締結した政府や海軍を強く批判し始め、大衆運動を展開した (後藤 1986: 239)。1933 年には愛国社の機関誌である愛国新聞社に南方進出の重要性が初めて説かれており、海軍の将校に影響力を及ぼし始める (後藤 1986: 240-241)。
- ⁹ 読売新聞が提供するオンラインデータベース「ヨミダス歴史館」を用いた。
- ¹⁰ 単語数は序文に記されている内容に従った。本表に示す以外にも、マレー語辞書は幾種類か刊行されていたようである。たとえば、増淵佐平 (1927) 『実用馬來語辞書』花屋商会書籍部 (シンガポール) や藤野可護 (1941) 『模範馬日辞典』、花屋商会 (シンガポール)、増淵佐平 (1941) 『実用馬來語辞典』平凡社などである。宮武の三冊の辞書の刊行後にも上原訓藏 (1944) 『日馬新辞典』、晴南社と佐藤栄三郎 (1944) 『インドネシヤ最新馬來語辞典』、弘文社などが刊行されている。これらの辞書と宮武の辞書との比較は、今後の課題としたい。
- ¹¹ 宮武の辞書がポータブルなサイズであったのに対して、武富の『大辞典』が箱入りの重厚な装丁であったことも、書齋での使用よりは生活の中で使うことが多い一般の購入層を遠ざけていたと指摘することは出来るだろう。
- ¹² 比較作業の行程で Winstedt (1922) による英語・マレー語辞書も適宜参照した。
- ¹³ 衣服関連の語として、*Picture Dictionary Bilingual* (Bahasa Inggeris-Bahasa Malaysia) (KL: Buku Must.2011), の “Men’s Clothes (Pakaian Lelaki)” および “Ladies’ Clothes (Pakaian Perempuan)” の項目に掲載されている語をピックアップしたうえで、時代による生活様式の違いか

ら当時の辞書に掲載されていない「レインコート」「パジャマ」「ヘルメット」「タキシード」などは除外した。また、以下で挙げる *rantai* や *ragam* などは、同書でそれぞれ「ネックレス、首飾り」と「制服 (*seragam*)」として掲載されている単語である。宮武らの辞書にこうした意味で所収されていないが、比較のために本論に採用することとした。

¹⁴ 天理大学附属天理図書館の蔵書印の日付から確認した。

¹⁵ *hidoep* は当時のインドネシアの綴り方で、英領マラヤでは *hidup* と綴る。

¹⁶ *seloear* は当時のインドネシアの綴り方で、英領マラヤでは *seluar* と綴る。

¹⁷ *rantai* は現代マレー語で「鎖」や「チェーン」のほか、身につける首飾りなどを指す。

¹⁸ 宮武の記す「熟語」は、文字通りのイディオムだけでなく、定型表現やコロケーションなどを指していると思われる。

¹⁹ おそらく、“*Tam*” (タミル語由来の語) と表記したかったのではないと思われる。

²⁰ 舟田らが指摘するとおり、宮武 (1942) において出版予定段階にあるとしていた『模範馬來語大辞典』(亞州文化研究所) は、1943 年の『大辞典』を指すと考えるのが妥当である (舟田、工藤 2017: 100)。同辞典を紹介する箇所、宮武 (1942) は *Wilkinson* (1932) を「殆ど全譯した」(p.19) と述べている。「殆ど」から除外されている箇所として、文学作品の出典や、外国語起源の単語の場合、語源に関わる箇所などが該当する。

²¹ 当時のインドネシアの綴り方では *sepatoe* となり、英領マラヤでは *sepatu* と綴るが、同一の単語である。

²² 上記の注と同じく、当時のインドネシアの綴り方では *kasoet* となり、英領マラヤでは *kasut* と綴るが、同一の単語である。

²³ 詳細は本稿の末尾に別表を作成したので参照されたい。

²⁴ 加藤 (2017) が「祖国 (*tanah air*)」という語を取り上げて、19 世紀から 20 世紀に半ばに刊行された辞書における意味を分析しているような作業が筆者らの念頭にある。

参考文献

- Collins, James T. (2016) “Exploring Medical Terminology in Miyatake’s Malay-Japanese Dictionary (1942)”, working paper for AAS in ASIA Conference at Doshisha University, Kyoto.
- Departemen Pendidikan Nasional (2008) *Kamus Besar Bahasa Indonesia Pusat Bahasa (Edisi Ke-4)*, Jakarta: Penerbit GT Gramedia.
- 江利川春雄 (2016) 『英語と日本軍——知られざる外国語教育史』NHK 出版。
- 舟田京子、工藤尚子 (2017) 「日本におけるインドネシア語教育の先駆者——宮武正道の辞典に関する考察」『神田外語大学紀要』29: 85-112。
- 後藤乾一 (1986) 『昭和期日本とインドネシア』勁草書房。
- Horne, Elinor Clark (1974) *Javanese-English Dictionary*, New Haven and London: Yale University Press.
- 加藤剛 (2017) 「「国家英雄」以前——「祖国」の創出と名づけをめぐる」山口裕子、金子正徳、津田浩司編『「国家英雄」が映すインドネシア』木犀社。
- Koesman M.O. (1984) *Kamus Kecil Sunda-Indonesia*, Bandung: Penerbit Terate Bandung.
- 黒岩康博 (2011) 「宮武正道と「語学道楽」——趣味人と帝国日本」『史林』94(1): 125-153。
- 黒岩康博 (2014) 「宮武正道宛軍事郵便——インドネシア派遣兵士と言語研究者」『天理大学学报』66(1): 103-122。
- Kuroiwa, Yasuhiro (2012) “Military Mail for a Linguist: Soldiers Who Support and Profit from the Language Studies of Masamichi Miyatake,” *Zinbun* 43: 35-50.
- 宮武正道 (1938) 『日馬小辞典』岡崎屋書店。
- 宮武正道 (1939) 『南洋文学』弘文堂。
- 宮武正道 (1942a) 『コンサイス馬來語新辞典』(興亜協会(編)、宇治武夫・ラーデン・スジョノ校閲) 愛国新聞社出版部。
- 宮武正道 (1942b) 『大東亜語学叢刊 マレー語』朝日新聞社。
- 越智有 (1923) 『馬日辞典』南洋協会台湾支部(台湾総督府内)。
- 武富正一 (1942) 『馬來語大辞典』旺文社。
- Teeuw, A. (1961) *A Critical Survey of Studies on Malay and Bahasa Indonesia*, 'S-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- 統治学盟(編) (1943) 『標準馬來語大辞典』博文館。
- Wilkinson, R.J. (1901) *A Malay-English Dictionary*, Singapore: Kelly and Walsh Ltd.
- Wilkinson, R.J. (1932 (1943)) *A Malay-English Dictionary (Romanised)*, Tokyo: Daitōa Syuppan Kabusiki Kaisya.
- Winstedt, R.O. (1922) *An English-Malay Dictionary (2nd and Revised Ed.)*, Singapore: Kelly and Walsh Ltd.
- 山口真佐夫 (1996) 「日本で発行されたマレー語・インドネシア語関係の文献」『撰大人文学』3: 147-171。
- Zoetmulder, P.J.(1982) *Old-Javanese-English Dictionary Part I*, Leiden: Koninklijk Instituut Voor Taal-, Land-, En Volkenkunde.

付表 1: スリッパ、下駄、その他類語の比較

	selipar	selop	cenela	cerpu	capal	gambaran	bakiak	terompah	kencong
現代マレー語辞書 Kamus Dewan ed. Ke4	sj alas kaki, capal, selop, ~ jepun selipar drpd getah yg mempunyai tali berbentuk v dan hujungnya dikelit antara ibu jari dgn jari kedua (ketika memakainya); berselipar memakai selipar; kebanyakan kami lebih suka ~ sahaja ketika berehat.	IB selipar.	alas kaki spt selipar yg ber-sulam dll pd penutup jarinya, kasut tekat.	sj lapik kaki (spt terompah) yg dibuat drpd kulit; ke bawah ~ ke bawah dtuli.	sj selipar yg dibuat drpd kulit dan rupanya seakan-akan selipar jepun, cerpu.	terompah drpd kayu.	C sj terompah.	I. sj alas kaki drpd belulang yg tidak disamak; 2. = ~ kayu sj alas kaki yg dibuat drpd kayu, kasut, gamparan; berterompah memakai terompah; kakinya ~ kayu yg menghasilkan bunyi hentakan yg kuat	Kencong のエントリーはあ るが、I と II とともに履き物の 意味はない。
越智 1923	n.d.	n.d.	"Chénela" (Port) スリッパ、上履	n.d.	"Chapal" 靴の或種 類	n.d.	n.d.	"Terompah"="Terompak" で、後者の意味が木底靴、 下駄	n.d.
宮武 1938	n.d.	Selop "スリッパ"	"tjenéla" スリッパ	n.d.	n.d.	n.d.	"bakiak" 下駄	n.d.	n.d.
宮武 1942	n.d.	"selop"+C[Ned] スリッパ、上履	n.d.	"tjerpoe" [Taml] 草履、 スリッパ、bawah tjerpoe 下駄の臺、臣 底の地位 mendoendoeng tjerpoe 王として尊 ぶ	"tjapal" 木履、下駄 、スリッパ; tali tjapal 鼻緒	"gambaran" [Soen] ①下駄の一 種、②私	"bakiak" [Dj] 下駄、木履	"terompah" 木履、下駄	n.d.
統治学盟 1943	"selipar" [Eng.] スリッパ	"selop" [N.I.<Dutch] スリッパ、上ばき (=seloep)	"tjenéla" (chénela 英) [Port] 刺繍した 上靴(スリッパ)、舞 踏靴(この種の飾り の付いた靴はジャン プでは着用又は礼 服の際用いる)	"tjerpoe" (chiémpu): ① [Taml] 藤草履のサ ンダル靴、ke bawah tjerpoe 殿下 ② 木の 名 尚 tjerpoe (アラビア 服を着た時にはく靴) (<kasutに記された 説明)	"tjapap" (chopal 英) [Hind.] 印度人の装 束(草履で下駄 の如く鼻緒をすげ たサンダル)	"gambaran" [Sund.] 1. 下駄の一 種 (terompah kadjoe) 2. 私	"bakiak" [Batav.<Ch.] 木靴、下駄	"terompah"; "terompah"; "terompak" (インドネシ ア) 草履、下駄 (= [Min] tarompah; 特にスマトラ ので縫っていない皮の粗 裡に作られた草履 terompah besi 蹄鉄 (=terompah koedat; sepatoe besi; nai; besi koedat) toekang terompah koedat 蹄鉄鍛冶屋 ikan terompah したがいれいの一 種 (=ikan lidah) terompah kajoe 木下駄; tali terompah 下駄の鼻緒	"kénjong" (kénchong 英) ① kasoet kénjong 上向き に反った爪先飾のあるスリ ッパ ② akar kénjong 上昇 植物の名 ③ [Sp.] だます、欺 く (késjone) ④ 紙の一線、支 那人の髷髪、トルコ帽の中央 に垂れ下がった線
								terompah=労働服を着た 時にはく靴 (<kasutに記 された説明)	

<p>Wilkinson 1901</p>	<p>"sèlipar". Eng. Slipper.</p>	<p>n.d.</p>	<p>cènela. [Port.: chinela.]</p>	<p>"chèru" I. Tam. Sandal; clogs. Chèrèpu pun tiyada di-pakai marika-itti: they wore no sandals; they went barefooted; Ht. Gul. Bak., 120. Kayu di-bèl di-buwat chèrèpu; they bought wood to make clogs; Sh. Raj. Haij. 184.</p>	<p>"chèru" I. Tam. Sandal of tanned leather, the local sandal-shoe (tèrompah) being of untanned leather and rough make. Worn with Arab or Indian dress, e.g. by mosque-dignitaries; cf. chènèla (worn in Java by princes and regents) and tèrompah (by the peasantry). But this is a modern distinction; cf. ka-bawah chèrèpu for ka bawah (Sg. Samb.); mènjung ch (see junjong); and the words dari bawah ch. raja langit (from below the shoes of the Chinese Emperor), Mal. Anals 108. Also Charpu (KL); Charpu (B.); cf. chapal.</p>	<p>"chèrèpu". A shoe or sandal (from Palembang) consisting of a leathern sole with a band over the instep, and a thong passing between the big toe and its neighbour; H Abd., 231.</p>	<p>n.d.</p>	<p>"tèrompah". Wooden clogs, with a knob or handle to be caught between the big toe and the toe next to it; Kam. Kechl., ii. Also tèrompah. "terompah". Clogs; v. terompah. Ikan t.; a fish (unidentified); KL.</p>	<p>"kenchong". 1. Kasut kenchong; a type of slipper with upturned toes.</p>
<p>Wilkinson 1932</p>	<p>"sèlop". Eng. Slipper;=(N.I.)sèlop</p>	<p>"sèlop". Dutch slof (N.I.) Slipper</p>	<p>"chènela". Port. Slipper with embroidered toe-cap; buckle-shoe; Ornamental footgear of this sort is worn in Java with court-dress; cf chèrèpu (with Arab dress) and tèrompah (with working dress). Cf. also kasut, chapal, sé patu,</p>	<p>"chapel". [Hind. chappal] Indian sandal-shoe. Ht. Abd. 168. Worn by chetties in the Straits. A leather sole with a band across the instep and another jointing that first band to a point between the big toe and the toe next to it. Cf. chèrèpu and tèrompah</p>	<p>n.d.</p>	<p>n.d.</p>	<p>"tèrompa, tèrompah, or tèrompak". Indonesian sandal; patten. Also (Batav.) tèlumpak; (Min.) tarumpa. Specifically a sandal of untanned leather, roughly made and worn by the peasantry in Sumatra and Java; illd. Beth ii 1 the word is used loosely to cover wooden pattens or clogs (Mal. t. kayu, Jay. gamparan; illd. Mayer ii 471) which have a knot (kepala t.) to be held between the big toe and its neighbour. The true t. is held on the foot by a leather band across the instep and a second band passing between the two first toes. In design it resembles the chèrèpu (Jay. chèrèpu), illd. Mayer ii 471; but the chèrèpu is of finer finish and of tanned leather. Cf. also chapal, chènèla, kasut, sépatu. T. besi: horse-shoe; Sul Hid. 27. Peng. Kuda 48; =t. kuda: shoeing smiths. Ikan t.: a name for the sole. =ikan lidah.</p>	<p>"kenchong" 1. Kasut kenchong; slipper with upturned toecap. 2. Akar kenchong (or akar kenchong, W): woody climber. Melodorum manau-briantium 3. (Sp.) To chat; =kechong, q.v.</p>	